

難波渦

2008.10
No.10

題字 浅野鈴秀氏（日本書芸院一科審査員）

「大坂図屏風」国際シンポジウム イン グラーツ

2008年8月21日（木）
オーストリア
シュタイヤマルク州グラーツ市

昨年9月に関西大学で行われた「豊臣期大坂図屏風」に関する国際シンポジウムが、今夏は屏風の原本が所蔵されているオーストリアのグラーツ市で行われた。

「魅惑の探訪、豊臣期の大阪 エッゲンベルク城で再発見された大坂図屏風」と題されたシンポジウムが、市内にあるクストハウス・グラーツのスペース4で行われた。ペーター・パケシュ州立博物館ヨアネウム総監督の挨拶の後、7人の発表と質疑応答が行われた。発表は、ドイツ語と日本語で行われ、同時通訳が入った。発表者と発表題名は以下の通りである。

フランチスカ・エムケ（ケルン大学教授）

「エッゲンベルク城の屏風の文化的意義」

高橋隆博（関西大学教授／センター長）

「日本文化と屏風」

狩野博幸（同志社大学教授）

「洛中洛外図屏風とエッゲンベルク城の大坂図屏風

—16～17世紀の都市風俗図屏風としての歴史的意義」

北川央（大阪城天守閣研究副主管／センター研究員）

「16世紀末から17世紀初頭の大坂城」

黒田一充（関西大学教授／センター研究員）

「住吉大社の夏祭りの行列」

庄野真左子（前・ケルン東洋美術館学芸員）

「ファッションメーカーとしての東インド会社」

藪田貫（関西大学教授／センター総括プロジェクトリーダー）

「日本の屏風絵とヨーロッパ

—ライデン・グラーツ・エボラ・ローマ」

司会進行も兼ねたコーディネーターのエムケ氏は、エッゲンベルク城の大坂図屏風の紹介と風俗図としての特徴を紹介し、高橋氏は日本の屏風の歴史とその使用方法を紹介した。狩野氏は、日本に残る洛中洛外図を紹介しながら、大坂図屏風が京都の町絵師の工房の作品で、今まで洛中洛外図以外の作例がないことを指摘した。

休憩後、北川氏は現在の大阪城の紹介とともに織田・豊臣・徳川へと政権が移行する歴史を紹介され、黒田は



シンポジウムの様子

住吉祭の行列場面に登場する人物たちが現在も日本の各地の祭りに現れることを写真で紹介した。庄野氏は、東洋文化が西洋文化にどのように影響を与えたのかを漆器や陶磁器などを材料で紹介した。最後に藪田氏は、日本の屏風がヨーロッパにもたらされた経路と、屏風の下貼文書の資料的価値についても指摘した。

専門的な内容であるにもかかわらず多数の聴講者が参加し、質疑応答では、大坂図屏風のほか、ヨーロッパ文化の日本への影響に関する質問などが出された。

また、シンポジウムに先だって、20日（水）には、エッゲンベルク城の大坂図屏風の原本調査と修復担当者からの聞き取り調査、検討会を行った。現在は日本の間と呼ばれるようになった部屋の壁面には、あきらかに西洋人



エッゲンベルク城での屏風調査風景

が描いた中国風の人物画が描かれている。屏風はバラバラにされ、右端の第1扇と左端の第8扇の位置は逆だが、あとは反時計回りの順に、人物画の間にはめ込まれている。

今回の調査では、屏風の絵の具の状態や、画面の痛み具合と修復の状態など、現地でなければ確認できない多くの知見を得た。



西側上空からグラーツ旧市街地を望む（中央の川の下側、紺色の建物がクストハウス・グラーツ）

シュタイヤマルク州は、オーストリアの南東部にあり、ハンガリーやスロベニアと接する地域である。グラーツはその州都で、首都ウィーンに次ぐ第2の都市でもある。町の中心部を北から南へムーア川が流れ、川の東岸にシュロスベルグ（城山）があり、その南東麓に旧市街地が広がる。この旧市街地には16世紀以降の建物が残り、赤い屋根の街並みと聖堂の高い屋根が中世の風景をよく伝えており、1991年に世界遺産に登録された。狭い石畳の道を低床式の路面電車が頻繁に走っているが、その近代的な姿も不思議と街並みに合っている。

エッゲンベルク城は、旧市街地から路面電車で西へ約20分の所にあるハンス・ウルリッヒ・フォン・エッゲンベルク（1568～1634）の館で、広大な庭園の奥に、四隅と中央に尖塔を配し、中庭を持つ3階建の建物がある。365の窓から毎日違った景色を眺めることができるように設計され、各階の部屋の数も当初は大の月の日数に合わせて31だったという。最も広い3階東側の部屋は惑星の間（天井に惑星や12星座の神話の場面が描かれる）と呼ばれ、夏の間は毎週室内楽コンサートが催され、ラジオ放送がある。屏風のある日本の間は、惑星の間から南側へ7部屋回り込んだ小部屋である。

エッゲンベルク城は絵画や古代貨幣などを展示する博物館でもあるが、グラーツにはこの城を含む12の博物館施設があり、それらはまとめて州立博物館ヨアネウムとして運営されている。その中で一番新しい施設が、2003年に建設されたクストハウス・グラーツである。宇宙船がさかさまに着陸した姿を表すとされ、屋根の上に噴射口が何本も突き出した姿は、紺色の建物だがヒキガエルを連想させる。内部は4層に分かれ、上層からスペース1、2と呼ぶ2つの現代美術の展示空間と子どものためのスペース3がある。シンポジウムが行われたス

ペース4はレクチャーなどに使える空間で、カフェレストランやミュージアムショップとともに1階にある。

また、シュタイヤマルク州は現在のハンガリー方面から攻めてきたオスマントルコとの戦いの最前線になったため、旧市街地にある州議会の隣に大量の鎧などを納めた武器庫（ツォイクハウス）が残り、グラーツの南東郊外には、リーベンブルグ城など戦いの歴史を物語る文化遺産が多く残っている。北方郊外のシュテービングにはオーストリア野外博物館があり、国内各地の伝統的な民家などを移築しており、展示してある農具を見ると日本のものとよく似たものがあることに興味を持った。

シンポジウムを主催されたペーター・パケシュ氏、全日程に同行していただいたエッゲンベルク城博物館主任学芸員のバーバラ・カイザー氏をはじめとするヨアネウムのスタッフの皆様には厚くお礼を申し上げたい。



グラーツ中央広場（背後に城山の時計台）

現地を訪れた前の週は雨が続いたようだが、幸い7日間の滞在中は屏風の調査日に雨が少し降った程度で、ほとんど傘は使わず、昼間の気温も26℃以下と出発前の大阪の猛暑に比べて非常に過ごしやすい気候であった。最終日、空港に向かうタクシーの運転手が、「これから天気が崩れて、今日でグラーツの夏も終わりだ」と話すのが印象に残った。（研究員 黒田 一充）

第7回 NOCHS レクチャーシリーズ 「なにわの食文化～「天下の台所」からみる日本食～」

会場：なにわ・大阪文化遺産学研究センター

熊倉 功夫氏(林原美術館館長/国立民族学博物館名誉教授)

「日本料理の歴史」

山下 満智子氏(大阪ガスエネルギー・文化研究所副主任)

「モダン大阪の台所」

2008年7月3日(木)

「大阪の食いだおれ」という言葉にあるように、なにわ・大阪は食に対して一際こだわりの強い地であり、食は私たちの暮らしに最も身近で切り離すことのできない文化である。しかしいま、国際化の波のなかで、日本の食文化は大きく変化している。いまこそ日本食とはなにか、日本料理の伝統と創造を、「天下の台所」大阪から見つめなおす—今回のレクチャーシリーズはそのような意図で企画された。

当日はまず、山下満智子氏に近代大阪の食文化についてお話をいただいた。大阪の都市開発に合わせて誕生したガスビルは、西洋料理の普及だけでなく、女性たちを吸引する文化的サロンとしての役割も果たした。その後、女性の持ち場であった台所の近代化は家事労働を軽減していく反面、料理への意識をも変化させ、伝統的な食生活の崩壊をもたらす一因ともなった。山下氏は調理による脳の活性化についての科学的な研究も進めており、とくに火を扱うことは家庭におけるコミュニケーションを豊かにすることや、食育における「火育」や家庭調理の重要性を示された。

続いて、熊倉功夫氏に日本料理の変遷について講演していただいた。日本人が大陸の食文化を選択的に受容した結果、平安時代に日本食とその作法の原型が形成される。その後、茶の湯の懐石によって一汁三菜に代表される家庭料理の見直しがなされ、それが日本料理の転換点となった。そして、近代国家の建設過程で欧米社会を模

範とした結果、西洋的な食生活も一種の正統となる。熊倉氏は、現代の食生活や食育の動きも日本料理の歴史の流れであるとし、いま日本料理の原点へ回帰することは、今日の食をとりまく問題を考えるうえでも有効であるとまとめられた。

両氏の講演に共通して言えることは、身近な食を大切にするという視点であり、それはまさにセンターの食文化に関する取り組みと同じである。センターでは「なにわの伝統野菜」に注目し、実験農園で栽培するとともに、京野菜との比較検討会や、学校や地域での普及活動についての意見交換会などを行ってきた。そういった経緯をふまえて、当日はポスターセッションを開催し、食文化の担い手として精力的に活動をされている方がたに日頃の取り組みを紹介していただいた。



ポスターセッションの様子

展示資料の前では、参加者が興味深く観覧し、資料提供者の説明に聞き入る様子も見られ、今回の行事が食文化に携わる人びとの交流の場となったことは一つの喜ばしい成果である。討論の場でも活発な意見交換が行なわれ、なにわの食文化を考える材料の豊かさに改めて気付かされた。このように「なにわの食文化」をいくつかの角度から考え、いくつかの答えを^{すく}ることができたが、センターとしてはそれをさらに広げ、深め、そして発信していけるように取り組んでいきたい。

今回のポスターセッションにおきましては、野菜文化史研究センター所長の久保功先生、勝間南瓜普及の会^{こつまんきん}の辰巳久子様、豊下製菓株式会社様に、資料展示のご協力をいただきました。この場を借りて、心から厚く御礼申し上げます。

(生活文化遺産研究プロジェクト R.A. 石本 倫子)

(生活文化遺産研究プロジェクト R.A. 影山 陽子)



山下満智子氏、熊倉功夫氏

第5回ワークショップ 『紙芝居は楽しいぞ!』

会場：なにわ・大阪文化遺産学研究センター

講師：鈴木 常勝氏（紙芝居師／立命館大学非常勤講師）

2008年5月28日（水）

平成20年5月28日（水）、第5回ワークショップ「紙芝居は楽しいぞ!」を開催した。紙芝居師の鈴木常勝氏を講師としてお招きし、第1部では紙芝居の魅力についてご講演いただき、第2部ではキャンパス内で紙芝居の実演を行った。第1部の参加者は111名であった。

鈴木氏は、1972年に大阪で紙芝居を始め、現在も住吉公園や長居公園、全興寺（大阪市平野区）などで紙芝居を演じている。また、『紙芝居は楽しいぞ!』（岩波ジュニア新書、2007年）や『紙芝居がやってきた!』（河出書房新社、2007年）などの著書もある。



鈴木常勝氏

第1部では、センター1階の文化遺産実習・展示室において、鈴木氏に「紙芝居屋がやってきた!」と題して、ご講演いただいた。紙芝居に必要な道具（舞台・拍子木・銅鑼など）の説明から始まり、実演を交えながらの紙芝居の歴史、さらにご自身が出演されたテレビ放送のビデオ



第1部の講演の様子

オを紹介され、紙芝居師になったきっかけや実演での苦労話をお話いただくなど、盛り沢山の内容だった。

第2部では、関西大学博物館前の広場に場所を移し、拍子木の音とともに紙芝居を語る鈴木氏の声が響きわたった。紙芝居には付き物の水あめやせんべい、かたぬきが配られ、学生たちは馴染みの薄いお菓子と格闘しながら、紙芝居に見入っていた。紙芝居を演じている鈴木氏の周りには半円を描くように幾重にも人だかりができた。また、昼休みの時間帯ということもあり、キャンパスを行き交う多くの人びとも足を止めて、紙芝居に見入っていた。

鈴木氏は、紙芝居の魅力が紙芝居師と観客との対話にあるということを強調された。テレビなどは異なり、対話によって作りあげられる紙芝居は、昭和期における日本の庶民文化であり、現在においては貴重な「文化遺産」であることが確認できた。



紙芝居に見入る学生たち

アンケートから

- ・今回初めて紙芝居を見ましたが、一つ一つの話にストーリー性があり、とてもおもしろかったです。紙芝居というのが子どもに与えるものは大変大きいように感じました。（男子・学生）
 - ・とてもよかったです。（ビデオで紹介されていた）紙芝居を見ている子供たちの表情がとてもきらきらしていて楽しそうだったので、私も紙芝居を見て育ちたかったです。テレビよりも紙芝居の方が好きだという子供たちの言葉はとても感動的でした！（女子・学生）
 - ・地域社会の活性化につながるというのが、とても印象的でした。（女子・学生）
 - ・双方向にコミュニケーションの取れる紙芝居は、是非今後も続けてほしいと思います。（男子・学生）
- アンケートにご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

（学芸遺産研究プロジェクト R.A. 中尾 和昇）
（歴史資料遺産研究プロジェクト R.A. 松永 友和）

第3回「豊臣期大坂図屏風」研究会

会場：なにわ・大阪文化遺産学研究センター
大津留 厚氏（神戸大学大学院人文学研究科教授）
「青野原俘虜収容所」

2008年7月4日（金）

7月4日、大津留^{おつる}厚氏（神戸大学大学院人文学研究科教授）を講師にむかえ、第3回「豊臣期大坂図屏風」研究会が開催された。開会にあたり、まず内田吉哉（当センター特別任用研究員）が、「豊臣期大坂図屏風」研究の現状と課題について解説をおこなった。

今回の研究会では、これまでとはテーマを一変させ、近代におけるオーストリアと日本の交流史をとりあげた。大津留氏の講演は、兵庫県小野市と加西市にまたがる地域に存在した第一次世界大戦時の捕虜収容所「青野原俘虜収容所」を舞台として、そこに収容されていたオーストリア人達に関するものであった。

第一次世界大戦と日本の関わりについて、一例として高校の教科書では中国・青島のドイツ軍との交戦が挙げられる程度にとどまり、日本とは縁が薄い戦争であったと考えられがちである。まして、この戦争においてオーストリアと日本との接点があったことは、一般にはほとんど知られていないといえよう。

大津留氏の講演によれば、青野原俘虜収容所に収容されていたのはドイツ人のほかにオーストリア人も含まれ、さらにはイタリア出身でありながらオーストリア国籍を有する者もいたということであった。

青野原俘虜収容所に収容されていた兵士のうち、最も人数が多いのは実はオーストリア人であり、ついでドイツ人が多く、オーストリア国籍のイタリア人がごく少数という構成であった。こうした人数比率の差から、収容所生活の中で捕虜同士の間で軋轢が生じることもあったという。



大津留 厚氏

大津留氏は、神戸又新日報という新聞社が収容所内の様子を取材した記事を紹介しながら、20世紀初頭のオーストリア＝ハンガリー帝国が抱える多国籍・多様性について述べた。

また当日は、近世オーストリア史を主な研究テーマとする石井大輔氏（神戸大学大学院文化科学研究科博士課程／同・学術推進研究員）にもご出席いただいた。「豊臣期大坂図屏風」が2000年から2004年にかけてシェーンブルン宮殿スタッフによって修復された際の記録写真には、屏風の下張りに使われた古文書類も撮影されており、その中に聖母マリアが幼いキリストを抱く、いわゆる聖母子像をあしらった印刷物がみられる。今回の研究会に先立ち、大津留氏と石井氏にこの聖母子像の鑑定を依頼しており、質疑応答の時間に石井氏に登壇していただいた。



石井大輔氏

石井氏によると、この聖母子像をあしらった印刷物にはドイツ・アウグスブルクの金箔師の名が記されているとのことであった。アウグスブルクはドイツ南部の古都で、アウグスブルクがあるバイエルン州はオーストリアと国境を接する。その他に石井氏は、アウグスブルクは印刷業の盛んな都市であること、かつて「豊臣期大坂図屏風」の所有者であったエッゲンベルク家は14世紀から15世紀にかけての時期に、アウグスブルクからオーストリア・グラーツへ移り住んだと伝えられていることを述べた。

研究会の終了後、藪田貫総括プロジェクトリーダーは「豊臣期大坂図屏風」のように、他国との関わりを持つ研究テーマでは、互いの国が持つ文化や歴史を包括的に理解しあう必要があると語った。第3回「豊臣期大坂図屏風」研究会は、日本側の研究者が、屏風を所蔵するオーストリアに対する総合的理解を深めるうえで、大変有意義であったといえよう。

（特別任用研究員 内田 吉哉）



研究室だより

2008年度 第1回祭礼遺産研究例会

内田 吉哉（センター特別任用研究員）

「牧村史陽氏旧蔵写真にみる北摂の文化遺産」

佐々木 康人氏（関西大学非常勤講師）

「箕面・止々呂美の炭焼きと池田炭」

2008年6月17日（火）

今回の祭礼遺産研究例会は、大阪の文化遺産、特に、北摂地方に焦点をあてた講演をしていただいた。

まず、内田氏からは、郷土史家である牧村史陽氏の経歴と、当センターの所蔵する「牧村史陽氏旧蔵写真」の紹介があった。そして、牧村が撮影した膨大な写真のなかから、昭和30～50年代にかけて撮影された、高槻・池田・能勢・箕面地方などの北摂地域の写真とともに、その地域の特産や特徴である、①高槻の寒天作り、②池田の酒造業、③能勢のガマ、④箕面のサルのそれぞれについて、時代背景や地理的特性などととも説明があり、それらは「失われた文化遺産」としても注目すべきであると指摘した。

次に、佐々木氏講演では、箕面の止々呂美の炭焼きと池田炭についての説明があった。炭をつくる窯の製造方法や、炭にする材木（樺）、炭の製造過程など、写真を交えて説明がすすめられた。かつては、箕面の上・下止々呂美地域の約八割の家庭が炭の製造をおこなっていたが、現在では一～二軒の農家しか炭焼きをしていない、という。また、炭を隣接地の池田に出荷したため、この周辺で焼かれた炭を「池田炭」と称した。この池田炭は、『和漢三才図会』や『摂陽群談』によると世間の評判はよく、炭の断面が菊の花の形になっているのが特徴である、とされている。火力が強いので、茶爐に置かれたことなどが紹介された。

引き続いて、質疑応答では、炭を作る窯の形状についての質問があった。窯の高さについて腰が高い、あるいは低いなどと表現されるが、ここで紹介された窯はどち



佐々木康人氏

らか、という質問に対し、現存する窯はあまりにも少ないため、どちらかはわからないとのことだった。

最後に大谷渡プロジェクトリーダーから講評があった。大谷プロジェクトリーダーはかつて、寒天を干していたり、窯で炭を焼く光景を目にしていたことがあり、これらの光景は生活のごく普通の一部であった、という。このように、かつては当たり前だった光景が現在、「文化遺産」として考えられていることを、今一度検討してみる必要があることを指摘した。

（祭礼遺産研究プロジェクト RA. 和住 香織）

2008年度 第1回歴史資料遺産研究例会

吉井 克信氏（大阪歴史学会会員／センター研究員）

「寺内町研究の現状と課題 —真宗史の立場を中心に—」

2008年6月30日（月）

今回の例会では、近年、新たな展開をとげつつある寺内町研究の現状と課題について、吉井克信氏からご報告いただいた。

はじめに、これまでの研究史を丹念にたどり、1990年代以降、中世都市をめぐる学際的研究状況のもと、1998年に『寺内町の研究』全三巻（法蔵館）が刊行されるなど、寺内町研究も隆盛していったことが述べられた。続いて、そもそもなぜ寺内町に注目するのか、寺内町とは何か、その視点の有効性や寺内町の類型について、



内田吉哉氏



吉井克信氏

研究史をもとにわかりやすくご説明いただいた。寺内町の類型については、大きく本山系寺内町と在地系寺内町があり、本山系寺内町には例えば、吉崎（越前・加賀の境界）や山科（山城、京都郊外）、大坂（摂津）、天満（摂津）などがあること、在地系寺内町には、尼崎や富田、吹田などの都市的「寺内」と、富田林や大ヶ塚などの農村集落型・土豪居館型「寺内」があることが指摘された。

今後の課題では、分析概念としての「寺内町」は、史料用語としての「寺内」と必ずしも同じ意味合いではないこと、「寺内」という宗教寺院のもつ宗教的特質についてより追求されるべきだ、と提起された。

（歴史資料遺産研究プロジェクト R.A. 松永 友和）

2008 年度 第 1 回学芸遺産研究例会

藤田 真一氏（関西大学文学部教授／センター研究員）

「伊勢長島「独楽園」の環境—増山雪斎と大名庭園—

2008 年 7 月 7 日（月）

2008 年度第 1 回の研究例会では、藤田真一氏にセンター所蔵の『長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖』（以下『賀詞帖』と略記）を素材にした報告をしていただいた。

藤田氏は、まず『賀詞帖』の精細な書誌調査をもとに、『賀詞帖』の成立を天明 3 年（1783）と推定された。さらに、これを木村兼葭堂の私記である『兼葭堂日記』と照らし合わせることで、兼葭堂を中心とした『賀詞帖』成立の経緯が明らかになった。また、『賀詞帖』に寄せられた漢詩を詳しく見ると、それらは『古文真宝後集』に収録されている司馬温公の「独楽園記」を踏まえて作られていることがわかり、賀詞を揮毫した文人たちは、実際に完成した独楽園を見て詩を詠んだわけではないことが明らかになった。

最後に、江戸時代の大名庭園の在り方について言及され、大名庭園と一口に言っても、江戸藩邸内に造られた松平定信の「浴恩園」や地方の城下町に造られた「兼六園」など多岐にわたっており、それぞれが固有の意味を持っていることを述べられた。

（学芸遺産研究プロジェクト R.A. 中尾 和昇）



藤田真一氏

2008 年度 第 1 回生活文化遺産研究例会

森下 正博氏（センター研究協力者）

「なにわ伝統野菜（在来種）の衰退・復活の経緯とこれから」

2008 年 7 月 7 日（月）

当センターでは、天王寺蕪や毛馬胡瓜などの「なにわの伝統野菜」について研究および栽培を行なっている。今回は森下正博氏に、伝統野菜の衰退と復活について報告していただいた。冒頭では、森下氏のヴァイオリンに合わせて「ほたるの引っ越し」という詩が朗読された。詩では、人間に住処の川を汚された生き物たちがきれいな水を求めて旅立ってゆく。例会は、このように生態系や環境の変化を考えることからスタートした。

経済成長によって生産と消費の場所が隔たると、私たちの生命や自然に対する認識は希薄になってしまった。さらに価値観や生活様式の変化から、品質と汎用性に優れた交配種が求められ、伝統野菜などの在来種は衰退の一途をたどる。在来種は交配種に比べると個体差も大きく特定の土地条件でしか育たない。しかし、その雑駁性にこそ環境ごと次の世代へ伝えていく底力があり、今まさに伝統野菜は見直され、復活を遂げている。

当日は VTR の上映や資料展示を通して、学校や地域における伝統野菜の普及活動と、そこに懸ける人びとの思いに触れることができた。また、毛馬胡瓜を実際に試食して、野菜のもつ味わいだけでなくその意義を考える機会も得られた。

何を食べるかという選択には、その人の嗜好性や意識が表れ、その積み重ねが食文化である。しかし、今の子どもたちのように「食」の記憶や原体験が欠如すると、「食」を文化としても認識できない。食育の重要性は言うまでもないが、まずは森下氏が言うように、日々の食を大切に、食を通して私たちが自らの生活態度に気づき、それらも遺産として次代に受け継がれることを自覚していきたいと思う。

（生活文化遺産研究プロジェクト R.A. 石本 倫子）

（生活文化遺産研究プロジェクト R.A. 影山 陽子）



森下正博氏

新刊紹介

前号でもご紹介しましたが、紙面の都合上、入りきらなかった新刊について紹介いたします。

なにわ・大阪文化遺産学研究センター 2007

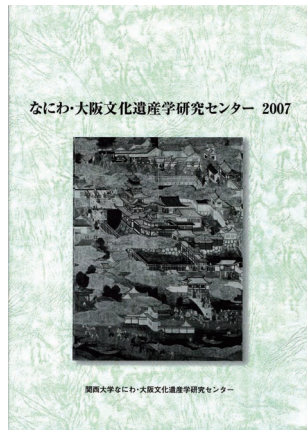
2007年度センター年報

[仕様]

A 4版、モノクロ、
横書き 157p、縦書き 48p

[発行]

2008年3月31日



NOCHS Occasional Paper No.6

「地域連携企画第3弾 もめん博物館 in 平野」

地域連携企画第3弾「もめん博物館 in 平野」および町ぐるみ博物館に関する聞き取り調査報告

[仕様]

A 4版、モノクロ、
横書き 52 p

[発行]

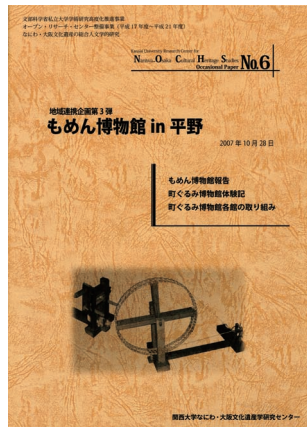
2008年3月31日

[編集]

影山陽子(センター R.A.)

[執筆]

影山陽子、宮元正博(センター R.A.)、岩下夕岐子(センター 2007年度インターンシップ生)、田中美帆(同)



夏野菜の収穫

本年度も、センター裏手の実験農園にて、なにわ伝統野菜の栽培を行っています。今年の夏野菜の収穫個数は右表のとおりです。

現在は田辺大根と天王寺かぶら、吹田慈姑を栽培しています。

	個数
けまきゅうり 毛馬胡瓜	38本
こつまなんきん 勝間南瓜	21個
せんしゅうみずなす 泉州水茄子	18個
たまつくりくろもんしろうり 玉造黒門越瓜	1個

なにわ伝統野菜収穫個数

(2008年9月現在)



収穫した勝間南瓜と泉州水茄子

今後の予定

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター
国際シンポジウム 新発見「豊臣期大坂図屏風」

日時：平成20年11月22日(土) 13:30～17:00

会場：関西大学東京センター

講師：Franziska Ehmcke氏(フランチスカ・エームケ)

(ドイツ・ケルン大学東洋学部日本学教授)

Barbara Kaiser氏(バーバラ・カイザー)

(オーストリア・エッゲンベルク城博物館主任学芸員)

狩野 博幸氏(同志社大学文化情報学部教授)

イサベル・田中・ファン・ダーレン氏(日蘭学会幹事)

編集後記

『難波潟』No.10をお送りします。

今年度上半期に行われた研究行事を詰め込む形になりましたが、いかがだったでしょうか。

下半期に入って2ヶ月がたち、この間にもいくつか研究行事が開催されました。11月には、東北への文化遺産視察、東京での国際シンポジウムが開催されます。10月に行われた文化遺産学フォーラム「水がむすぶ文化遺産」、地域連携企画第4弾「平野をさぐる」ともども、次号でお知らせしたいと思います。

(R.A. 影山 陽子)

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業(平成17年度～21年度)
なにわ・大阪文化遺産の総合人文学的研究

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

News Letter 「^{なにわがた}難波潟No.10」

発行日 2008年10月30日

発行所 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

発行者 高橋隆博

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

Tel 06(6368)0095 Fax 06(6368)0092

http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/

E-mail naniwa@jm.kansai-u.ac.jp

印刷所・編集協力 (株)廣濟堂